



## 年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

あなたの計る物差しは天の父が与えてくださる

今週の朗読は「ぶどう園の労働者」のたとえで、たとえに登場する主人の考え方にどこまで賛成できるかが問われています。何かが引っかかって、このたとえに登場する主人の考え方に賛成できないわたしたち。どこをどう変えていけば、喜んで賛成できるようになるのでしょうか。

18日敬老の日、甲子園球場に行ってきました。感激しました。この話だけでも30分は語りたいたですが、だれも喜ばないので手短に。

まず福岡空港から飛行機で伊丹空港に飛びました。飛行機で大阪に降りてみると、すでにタイガースファンがうろうろしてしまっていて、「大変な場所に来てしまった」とつくづく思いました。周りは敵ばかりという張り詰めた雰囲気の中で球場に向かうバスに乗りました。

球場が近づくとあら不思議。わたしと同じユニフォームを着た人たちが続々と集結しているではありませんか。これには勇気づけられました。いちばん危険な場所に行って、優勝を勝ち取って来る。並大抵の勇氣ではできないことです。

おかげで甲子園を後にするときも、誰彼問わずカープファンから「ヘーイ！」とハイタッチを求められて、気軽に応じました。若い女の子ですら、おじさんのわたしにハイタッチをしてくるのですから、どれだけ盛り上がったかが想像できるでしょう。阪神ファンの皆様、大変聞き苦しい話になってしまったことをお詫びいたします。

福音朗読に映りましょう。ぶどう園の主人は、時間を変えながら何度も労働者を雇いに出かけています。早くから雇った労働者はきつとやる気に満ちた人たちだったでしょう。

彼らは最終的にぶどう園の主人に不平を言いました。なぜか？わたしの想像ですが、賃金をもらう頃には雇ってもらった恩は忘れ果て、「働いてやったのにどうということだ？」と開き直っているのです。開き直る権利などないはずなのに。

その後も定期的に労働者を雇い入れます。ぶどうの収穫は一刻を争う仕事なのだそうです。ですから最終的には猫の子も借りたいくらいになります。しかしながら広場に残っているのはやる気もあまりない人たちです。

やる気を見せていたら、とっくに雇われていたでしょう。最後の人たちは、いわば履歴書の段階ではじかれ、面接すら受けさせてもらえず「どうせ俺たちを雇ってくれる人などいない」と投げやりになっている可能性が高いのです。

しかしぶどう園の主人は、この人たちの中に飛び込んで手を差し伸べます。「あなたもかけがえのない人です。わたしはあなたに人としてまともに暮らせるだけの仕事と賃金をあげましょう。」

やる気のあるなしにかかわらず、能力の有無にかかわらず、一人ひとりかけがえのない人として受け入れる。これがぶどう園の主人が示

した気前の良さでした。

投げやりになっていた人をおかけがえのない人として扱ってくれたぶどう園の主人に、最後に雇われたグループの人たちはどう思うでしょうか。ただただ、感謝しか浮かばないのではないのでしょうか。

今日も見捨てられるに違いない。今日もきっと人として扱われない。そう諦めていた人の中に飛び込んで手を差し伸べる。能力のある人だけが価値があり、ほかは価値がない。そうやって差をつける社会に、広場で突っ立っている人の中に飛び込むお方は問いかけるのです。「わたしは誰も拒まない。わたしの声に耳を傾けなさい。」

ある年の叙階式ミサで、司祭に叙階される方を育てた小教区の主任司祭が次のような説教をしました。「司祭がキリストの身分においてささげるミサは、永遠の価値がある。たとえ、司祭に叙階された者が一度しかミサをささげることができず、翌日には亡くなってしまったとしても、その人は完全に司祭職をまっとうしたのである。」言葉はまったく同じではないかもしれませんが、おおよそそのような説教でした。

わたしは、「そうかなあ」と思いながら聞いたのを覚えています。「十何年、司祭職を目指して準備を続けたのに、一日しかミサをささげることができなかつたら責任を問われるでしょう。」わたしはそう考えたのです。

きっとわたしも、賃金をもらうために行列に並んでいる一人なのだと思います。しかも、25年このかた司祭として働いて、数えきれないほどミサをささげて、それなのに父なる神の気前の良さを忘れ果て、「働いてやっているんだから報酬をくれ」と列に並んでいる者に違いありません。そして一日しかミサをささげることができなかつたら司祭を見て、「あの人よりはました」と思っている人間。それがわたしなのだと思います。

どうすれば、最初から初めて最後の者まで気前良くしてくださる神の思いに賛成できると答えることができるのでしょうか。わたしは大切なことを忘れていました。主の祈りは次のように祈っています。「みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように。」

「みこころ」とは、たとえば話のぶどう園の主人が示した「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」(20・14)という態度にほかなりません。どうか、みこころが地にも行われますようにと、わたしたちは毎日、もしかしたら日に何度も、願っているのです。

言葉に裏表があってははいけません。わたしたちは祈っているのですから、最後に一時間だけ協力した人に神がねぎらいの言葉をかけるのなら、わたしたちはそれに賛成しますと、答えなければなりません。わたしたちが神の子となるためです。この世が大切にしている仕事の量、仕事の質で計る物差しを横において、わたしたちが計る物差しは、天の父が示した物差しですと、きっぱり言える生き方をしましょう。そのための恵みをミサの中で願いましょう。